

寄付者となった先輩卒業生より

東京大学では、自立的な経営基盤を支えるため、寄付金がとても重要な役割を果たしています。

これを読んでいる皆さんは、「寄付のお願い」と聞くと、卒業してすぐの寄付は正直難しいと感じるのではないのでしょうか。しかし、そうだとすると、様々な境遇の後輩たちに想いを馳せてみて、皆さんが寄付で大学を応援することについて、考えてみませんか。

自分の想いに気づかせてくれる寄付



林 まりか 様

東京大学工学部機械情報工学科、情報理工学系研究科知能機械情報工学科(情報システム工学研究室)を経て、学際情報学府博士課程を修了。2011年に株式会社キビテックを設立、代表取締役CEOに就任。



インタビュー全文はこちら

「オタク集団」と挑んだロボコン。

RoboTech活動危機で奔走

生まれは、富山県の下新川郡朝日町です。大学進学を考え始めた頃、もう少し頑張れば東京大学に行けるかもと思い、受験勉強に励み、一浪を経て何とか理一に合格することができました。大学では、ロボット工学を専攻していくことになるのですが、「ロボコン」(ロボットコンテストの略で、ロボットをチームもしくは個人で製作して、その性能を競う大会)に挑戦したことが大きかったと思います。

まず2年次の全学ゼミの授業で、おもちゃのブロックと、それを動かすプログラミングツールを使って、簡単なロボットをつくったんですね。これが想像以上に面白く、楽しかったんです。そして、学内に「RoboTech(ロボテック)」というロボコンサークルがあることを知り、3年次から入部

しました。

私は会計係でしたが、本当にいろんなことをやりました。入部した時の部室は、当時の工学部2号館の中庭にある物置小屋。ここで「みんなでロボットつくっています」というオタクの集まりです(笑)。でも、工学部2号館の建て替え工事が始まって、その小屋が取り壊されてしまい。新たな活動拠点を設けるために、工学部の施設管理の方や工事現場監督の方などに暗中模索ながらご相談し、応援してくださる先生や同期に助けをいただき、工学部に対して、活動の意義を説明する書類などを出しました。最終的には農学部棟との隙間にできた小さなプレハブ小屋を正式に使わせてもらえることになりました。ここが今でもRoboTechの活動拠点(ものづくり実験工房)となっています。

あとは、卒業生からの寄付募集を発案してスタートし

ました。OB・OGの方々の連絡先を辿って調べ、実際に会いに行く、メールでお願いします。「一口5000円から、お願いします!」と。そんな裏方業務を率先してやりながらも、しっかりロボコンに出場して、ベスト8に入ることができました。

「人とは違うことがしたかった」

「ロボット博士」がベンチャー社長に

学部生の頃、知能ロボットを専門とされていた佐藤知正先生(現東大名誉教授)のゼミに所属していました。佐藤先生から言われた2つのお話が心に残っています。一つは、「研究者は、公的なお金もいただきながら、自分の好奇心に従って、ある意味、「遊」ばせていただく仕事だ」というお話。もちろん、無責任に遊ぶのではなく、社会からの期待を背負って、責任を持って、人類の好奇心を代表して活動する素晴らしい仕事だと得心しました。もう一つは、「研究の世界には、公募やそれ以外にも予算がつく仕組みがある。その機会を逃さないために、研究ビジョンをしっかり持ちつつ、常に実現までの予算計画を考えておくこと」。今、経営者となって仕事をするうえでも、大切な教えだったと感謝しています。

大学院に進んだのは、まだまだロボットの研究を続けたいと考えていたのと、親も「進学していいよ」と言ってくれたからです。そもそも私は、何か人と違ったことがしたかったので、「ロボット博士って、十分に変わっているよね」と(笑)。

もともとアカデミックの道に進むとは決めていなくて、でもヒューマンインターフェース研究に関わる仕事をしたいなど、三菱電機への就職を決めました。入社後は、土日などプライベートの時間を使って、自由な研究や工作をしようと考えていました。当時、結婚をきっかけに引っ越したのが、居住用ではなく工場用の物件で(笑)。お風呂はないけど、ここなら工作機械とか実験器具を置いても大丈夫だし、音を出しても平気だという理由で契約しました。そこで仲間たちと電子工作をやっているうちに、電磁波を使ったセンシング技術が面白いと思うようになりました。

大学や会社から提示された研究に縛られることなく、

自分たちでつくりたいものをつくる自宅ガレージでの活動が、私にとってはとても面白く、刺激的でした。この仲間たちと一緒にものづくりを続けていきたいという思いと、社会的活動にも取り組みたいという志がどんどんふくらんでいきました。その直感を大切に、三菱電機を退職し、2011年に株式会社キビテックを起業しました。

自分の価値観を外側から形成してくれる寄付

現在、キビテックでは、ロボット用の遠隔制御システムとオペレーションセンター機能を複合させた「HATS」というサービスを提供しています。ロボットで遠隔就労できるようにして、世界の雇用機会を均等化することを目指しています。このサービスは、出産を機にスタートしました。

それまでは、社会に関わるということは考えていなくて、自分とか自分の周りがやりたいことをやる、生きのびていかなければいけないと考えてやっていただけなんです。そういう考え方でいると、稼げればいいやとかお金が得られればいいやとなりがちなんですけど。社会に対して意義のあることを、お金じゃなくてどういうビジョンを掲げて、途中どういう結果になったとしてもやってよかったなと思うところ、判断基準が変わっていったんですね。

寄付の話でいうと、出産するまでは、寄付ってどこにしようかっていうのが決められなくて、すごく「気持ち悪い」存在だったんですね。自分の中で、何を大切にしているのか、それとも大切にしないのかっていう方向性がなかったんです。

私にとって寄付とは、外側から私に対して「あなたはこういうものを大切にしているんですよ」ともう一度認識させてもらえるものだと感じています。寄付って、いろんなプログラムや物事に対するものがあると思うんですけど、どれかを選んでいかなきゃいけない。どこに寄付しようかと考えていく過程の中で、自分の中でこれを大切にしようというものを考えるものだと思うんです。

私は東大基金を通じてRoboTechに寄付をしていますが、年に1回現役の学生から連絡が来ると、日常を過ごしていると忘れてしまいがちな「ロボットを通じて社会に意義のあることをしたい」という自分の想いに気付かせてもらっています。

東京大学基金

検索

[東京大学基金事務局] mail: kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp tel: 03-5841-1217